相続ゲーム

エイブリーと億万長者の謎の遺言

The Inheritance Games

Avery and the Billionaire's Mysterious Will

人物紹介

グラムス姉妹

コネチカット州に住む
母親違いの姉妹

エイブリー・カイリー・グラムス…十七歳の女子高生。突然、いわれのない莫大な遺産を相続することになり、その謎を追う

リビー・グラムス…エイブリーの姉（二十四歳）。パンクとゴスファッションを愛する老人介護施設の職員。エイブリーと共にホーソーンハウスに赴く

ホーソーン四兄弟

トバイアスの四人の孫。
母はスカイだが父親は全員違う

ナッシュ・ウェストブルック・ホーソーン…長男（二十五歳）。相続については達観し、状況を見守るカウボーイ

グレイソン・ダベンポート・ホーソーン…母の期待を背負った冷静沈着な次男（十九歳）。エイブリーを疑い、家族を守ろうとする

ジェイムソン・ウィンチェスター・ホーソーン…謎解きが好きな奔放な三男（十八歳）。エイブリーとともにトバイアスの残した謎に挑む

アレクサンダー（ザンダー）・ブラックウッド・ホーソーン…気まぐれで自由人の四男（十六歳）。天才肌の発明好き

ホーソーン家の人々

テキサス州の通称ホーソーンハウスの住人たち

トバイアス・タッターソール・ホーソーン…七十八歳で死去。莫大な遺産をエイブリーに譲った、全米で九番目に裕福な大富豪。ゲームやからくりをこよなく愛していた

スカイ・ホーソーン…トバイアスの娘で四兄弟の母親。奔放なふるまいで周囲を振り回す

ザラ・ホーソーン・カリガリス…トバイアスの娘。スカイの姉。エイブリーを敵視している

ティア・カリガリス…ザラの二番目の夫コンスタンティンの姪。エイブリーと同じ学校に通う

トビー・ホーソーン…トバイアスの息子。若いころに事故死したらしい

ラフリン夫妻…ホーソーン家に古くから仕え、身の回りを世話している

エミリー・ラフリン…ラフリン夫妻の孫。姉妹の姉。十七歳のときに死去

レベッカ・ラフリン…姉妹の妹。エイブリーと同じ学校に通う。おとなしく内気な性格

エイブリーを取り巻く人々

ジョン・オーレン…ホーソーン家の警備隊長。現在はエイブリーを警備している

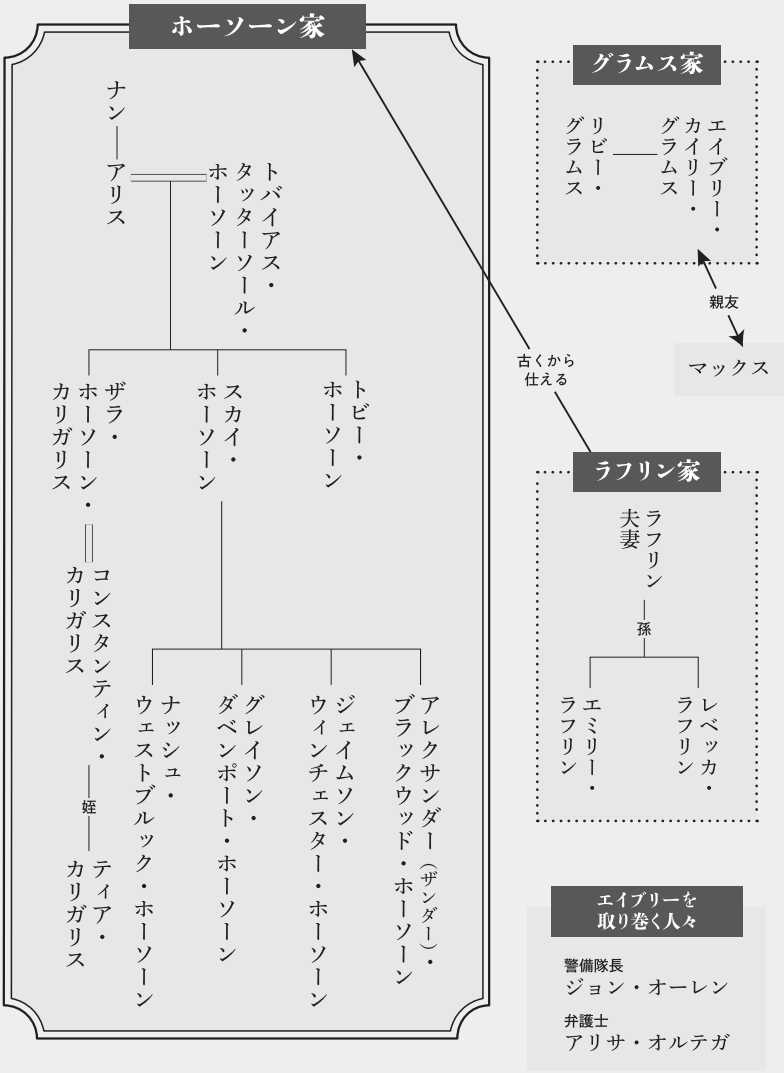
アリサ・オルテガ（リーリー）…マクナマラ・オルテガ・アンド・ジョーンズ法律事務所の弁護士。相続人であるエイブリーをサポートする

リッキー・グラムス…グラムス姉妹の父。現在はミシガン州で酒浸りの毎日

ドレイク…リビーの元カレ。暴力的で、姉妹につきまとう

マキシーン・リュウ（マックス）…遠隔地に住むエイブリーの親友。アジア系のしつけが厳しい家庭に育つ

人　物　相　関　図


ホーソーン家
ナン
アリス
トバイアス・タッターソール・ホーソーン
トビー・ホーソーン
スカイ・ホーソーン
ザラ・ホーソーン・カリガリス
コンスタンティン・カリガリス
ティア・カリガリス
姪
アレクサンダー（ザンダー）・ブラックウッド・ホーソーン
ジェイムソン・ウィンチェスター・ホーソーン
グレイソン・ダベンポート・ホーソーン
ナッシュ・ウェストブルック・ホーソーン
グラムス家
エイブリー・カイリー・グラムス
リビー・グラムス
親友
マックス
古くから仕える
ラフリン家
ラフリン夫妻
孫
レベッカ・ラフリン
エミリー・ラフリン
エイブリーを取り巻く人々
警備隊長
ジョン・オーレン
弁護士
アリサ・オルテガ

1.

ママが考えだすゲームが好きだった。〈音を立てちゃダメゲーム〉とか〈クッキーゆっくりはぐはぐゲーム〉とか。お気にいりの定番は〈マシュマロもぐもぐゲーム〉。真冬に暖房をつけずにリサイクルショップで買ったもこもこ服でマシュマロを食べるってだけ。電気を止められたときは〈懐中電灯ピカピカゲーム〉。床を溶岩ってことにして走り、枕で砦を作る。

いちばん長く続いたのは、〈わたしの秘密はなんでしょうゲーム〉。ママがいうには、誰でも最低ひとつは秘密を持ってるはず、らしい。ママがわたしの秘密を当てる日もあれば、当てられない日もあった。毎週欠かさずやってたそのゲームができなくなったのは、わたしが十五歳になったとき。ママは、秘密のひとつが発覚して入院した。

と思ったら、あっという間にいなくなっちゃった。

「ほら、プリンセスの番だぞ」

かすれた声で現実に引きもどされた。「いつまで待たせる気だ」

「プリンセスじゃないし」

わたしはいいかえして、ナイトの駒を進めた。「はい、ハリーおじちゃんの番」

ハリーが顔をしかめてみせる。ハリーの本当の年齢は知らないし、どういう経緯で、毎朝わたしたちがチェスをするこの公園に住みついたのかも聞いてない。わかってるのは、かなり手強い

相手だってこと。
「ったく、容赦ないヤツだな」。ハリーがボードをにらんでぶつぶついった。
三手後、わたしはハリーを追いつめた。「チェックメイト。はいっ、ハリー、いいね？」
ハリーがわたしをギロリと見る。
「しょうがない。おごらせてやる」
わたしたちがずっと前に決めたルール。わたしが勝ったら、ハリーはおとなしく朝食をおごられる。
我ながらエラいと思うけど、ニヤニヤは最小限にしといた。
「クイーンってのも悪くないね」

ギリギリセーフで学校に間に合った。ギリギリ、ってのがわたしのデフォルト。成績も綱渡り状態。Aをとるのに最低限必要な努力を計算してる。怠けてるんじゃない。効率を求めてるだけ。九十八点じゃなくて八十点でいいから、そのぶんの労力でバイトのシフトを増やす。
効率を求めてスペイン語の授業中に英語のレポートの下書きしてたら、校長室に呼び出された。わたしみたいな透明人間状態の生徒はふつう、校長に呼び出しなんてされない。そもそも面倒を起こしたところでたいして目立たないんだけど、わたしの場合はそれさえゼロ。
「エイブリー、座りなさい」
アルトマン校長の声は、あったかいとは程遠かった。
わたしが座ると、校長は机の上で手を組んだ。「なぜ呼ばれたか、わかっているだろうね」

えーっと、もしかして週一で学校の駐車場で開いてるポーカー大会のこと？　ハリーの朝食と、たまに自分のぶんの朝食のお金を調達するためにやってるんだけど。あれくらいしか、学校側から目をつけられるような行為は思いあたらない。

「すみません、わかりません」わたしはいかにも従順そうに答えた。

校長は、しばらく黙りこんだ。それから、ホチキスでとめた紙の束を差しだした。

「きのうのイェーツ先生の物理のテストだ」

「あ、はい」期待されてる答えじゃないのはわかってるけど、ほかにいいようがない。今回はめずらしくちゃんと勉強した。呼び出しくらうほどひどかったとは思えない。

「エイブリー、君だけ満点だった」

「あ、よかったです」あ、はい、を繰りかえさないように気をつかった。

「よくはない。イェーツ先生は、生徒に力不足を認識させるようなテストをつくっているんだ。二十年間、満点の生徒はいない。なにが問題か、わかったかな？」

とっさに思った通りのことを口走ってしまった。「ほとんどの生徒が解けないテストをわざわざつくるって、どんな？」

校長があきれたように目を細くする。「君はいい生徒だ、エイブリー。置かれている環境を考えればよくやっている。だが、成績が常にトップとはいえないだろう？」

まあ、そうなんだけど、なんかムカつくいい方。

「君の環境に同情していないわけではない。だが、正直に話してくれないか」校長はわたしの目をじっと見つめた。「イェーツ先生がすべてのテスト問題をクラウドに保存していることを知って

いたんだろう？」
あ、カンニングってこと。校長はわたしにじっと目を向けてるのに、これほど相手のことが見えてないとはビックリ。「エイブリー、君を助けたいんだよ。人生とは不公平なものだが、君は本当に頑張っている。将来の計画だっていろいろ立てられるかもしれないのに、挫折してほしくないんだ」
「計画を立てられる、かもしれない？」思わず繰りかえした。ちがう家に生まれてたら？　父が歯医者で母が専業主婦とかだったら？　それならもっと選択肢があるっていいたいの？
「あと一年で卒業です。この成績なら、コネチカット大学の奨学金候補になれるはずです。全米トップクラスの保険数理学のプログラムがありますから」
校長が眉を寄せる。「保険数理学？」
「統計学を用いて保険や金融のリスク管理をするんです」ポーカーと数学を専攻したいと思ったら、これがいちばん近い。しかも、仕事に困らない。
「リスクを計算するのが好きなようだな」
カンニングとか？　ブチギレそうだけど、グッと我慢してチェスをしているつもりになった。心のなかで次の手を考える。わたしみたいな生徒はカッとなったりしない。
「カンニングはしてません」冷静な声でいう。「勉強したんです」
時間を必死でかき集めて勉強した。ほかの科目の授業中、バイトのシフトの合間、夜中。イェーツ先生が解けない問題を出すことで悪名高いって知ってたから、解けないの基準を変えたくなった。いつもはギリギリを目指してたわたしが、どこまでできるか試してみたくなった。

なのに、このリアクション。わたしみたいな生徒が解けないはずの問題を解いちゃいけないとでも？

「テストを受け直します」ムカついてるのがわからないようにいう。ましてや傷ついてるなんて思われたくない。「もう一度満点をとればいいんですよね」

「新しいテストでも？　すべて前とは違う問題で、同じくらい難しい」

だからなに？「受けます」

「では、明日の三時間目にしよう。だが警告しておく。もし君が……」

「今すぐでかまいません」

校長がわたしを見つめる。「なんだって？」

従順な生徒、なんて知ったこっちゃない。透明人間なんてカンケーない。

「新しいテストを今すぐここで、校長室で受けたいんです」

2.

「学校でなんかあった？」

リビーが聞いてきた。七つ歳上の姉のリビーは共感力が高すぎて、よく損してる。本人だけじゃなく、わたしも。

「ううん、だいじょうぶ」わたしは答えた。校長室に呼び出された話なんかしたら心配させるだけだし、イェーツ先生が再試の採点を終えるまではどうすることもできない。わたしは話題を変

えた。「今夜はチップ、たくさんもらっちゃった」
「そんなにたくさん？」リビーは、ファッションはパンクとゴスが混ざってる感じだけど、性格的にはとことん楽観的。料理が六・九九ドル均一のローカルに人気のダイナーでチップを百ドルもらえるって本気で信じてる。
わたしはくしゃくしゃの一ドル札の束をリビーの手に押しつけた。「家賃の足しくらいには」
リビーがかえしてよこそうとするけど、すかさず手を引っこめた。
「受けとらないと投げつけるよ」リビーが怖い顔をしていう。
わたしは肩をすくめた。「よけるから」
「マジでありえない」リビーはしぶしぶお金をしまって、どこからともなくマフィンの型を取りだすと、わたしをじっと見つめた。「だったらこのマフィンは受けとってもらうからね」
「了解でーす」
リビーが差しだすマフィンを手に取ろうとしたとき、その向こうのカウンターが目に入った。リビーはマフィンだけじゃなく、大量のカップケーキも焼いてたらしい。胃のあたりがぎゅうっとなる。
「リビー……まさかだよね」
「違う、エイブリーが思ってるようなことじゃない」
リビーのカップケーキは、ゴメンナサイの印。罪悪感のカップケーキ。お願い怒らないで、のカップケーキ。
「わたしが思ってるようなことじゃない？　じゃあ、アイツとよりを戻したわけじゃないんだ

ね？」
「今度は前みたいにならないから。絶対に。ほらっ、このカップケーキ、チョコだよ！」
わたしの好きなやつ。
「ならないわけない」そうはいったものの、これでリビーに納得させられるくらいならとっくにどうにかなってるはずだ。
と思ったら……タイミングを見はからったみたいに現れたのは、リビーのくっついたり離れたりのカレシ。パンチをくらわす相手はカノジョじゃなくて壁、ってのがスゴい崇高な信条だと信じてるヤツ。ぶらぶらキッチンに入ってきてカウンターからカップケーキをパッとつかむと、わたしを上から下までじろじろ見た。
「おっ、誘惑してんのか？」
「ちょっと、ドレイク」リビーがたしなめる。
「ジョークに決まってんだろ。オマエも妹も、それくらい流せるようになれって」
開始一分にしてさっそく、こっちを悪者にしはじめてる。
「こんなのって、健全じゃない」わたしはリビーにいった。
ドレイクはリビーがわたしと一緒に住むのが気にいらなくて、ずっとブチブチいいつづけてる。
「オメエの家じゃねーだろ」ドレイクが声を荒げる。
「エイブリーはあたしの妹だから」リビーが反撃する。
「腹違いだろ」ドレイクがニヤリと笑った。「ジョークだよ」
笑えないけど、まちがってもいない。リビーとわたしは母親が違う。父親は家にほとんどいな

かったから、子どもの頃は年に一、二回会うくらいだった。二年前にママが死んで、まだ未成年のわたしをリビーが面倒みるといいだしたときは誰もがビックリした。リビーはまだ若いし、生活もギリギリだったから。でも、それがリビー。愛情にあふれてる。

「ドレイクがここにいるなら、わたしが出ていく」わたしはリビーに静かにいった。

リビーはカップケーキを手にとって両手でそっと包んだ。「エイブリー、あたしだってできる限りのことをしてるんだよ」

リビーは人に嫌われたくないタイプだ。ドレイクはリビーを板挟みにするのが好きで、わたしを使ってリビーを傷つけるのが趣味。

わたしは、壁にパンチがなくなる日をじっと待ってるわけにはいかない。

「わたしに用があったら、車のなかにいるから」

3.

わたしのおんぼろポンティアックはガラクタ同然だけど、ヒーターは機能してる。まあ、たいていは。バイト先のダイナーにいって、人が来ない裏口に車をとめた。リビーからメールが来たけど返信する気になれずに、ひび割れた画面をじっと見つめるのみ。データプランの残量はほぼゼロだからネットにはつながらないけど、メールは使い放題。

リビー以外にわたしがメールを送る人って、ひとりしかいない。マックスへのメッセージは短くまとめた。「アイツが戻ってきた」

すぐに返信はなかった。マックスは両親が厳しくて、たまにメールチェックが入る。しかも、しょっちゅうスマホをとりあげられてる。だからドレイクの名前は出さなかったし、今夜の居場所も書かなかった。リュウ家の大人たちにもソーシャルワーカーにも、わたしが普通は寝ない場所で寝てることを知られる必要はない。

スマホを置いて、助手席のバックパックをチラッと見る。宿題は明日の朝やろう。シートを倒して目を閉じたけど、眠れない。ダッシュボードに手を伸ばして、ママが遺してくれた唯一の価値あるものをとりだした。絵ハガキの束だ。何十枚もある。一緒にいこうって夢見てたいろんな場所の絵ハガキ。

ハワイ、ニュージーランド、マチュピチュ。一枚ずつ写真をながめて、ここではないどこかにいる自分を思い描く。トーキョー、バリ、ギリシャ。どれくらいそうやってぼーっとしてただろう、スマホが鳴って我にかえった。マックスからの返信だ。

「あのゴミ、処理してなかったんだ」そして少ししてから、「だいじょうぶ？」

たったひとりの親友のマックスは、中学三年の夏に引っ越してしまった。連絡手段はほぼメールで、マックスは両親に見られたら大変だから、汚い言葉を使いたいときは工夫する。

「だいじょうぶ」わたしは返信した。それきっかけで、マックスはわたしのための怒りを爆発させた。

「あんなゴミクズ、さっさと捨てちゃえばいいじゃん！！！」

その返信の直後に電話が鳴った。「本当にだいじょうぶ？」マックスが聞いてくる。

膝にのせた絵ハガキを見おろした。喉の奥がぎゅうっとなる。高校は絶対に卒業する。資格の

ある奨学金に片っぱしから申しこむ。割のいいリモートワークに就けるような学位をとる。
世界じゅうを旅する。
ふーっと息を吐いてから、マックスの質問に答えた。
「わかってるよね、マックス。わたしが必ず着地を決めるって」

4.

つぎの日、車中泊のツケがきた。体じゅうズキズキだし、体育のあとシャワーを浴びなきゃいけなかった。ダイナーのトイレのペーパータオルじゃ限界あり。髪を乾かす時間がなかったから、次の授業はびしょ濡れのまま。見た目がいいとはいえないけど、周りは同級生ばっかで、わたしなんて壁紙みたいなものだし。
誰も見ちゃいない。
「ロミオとジュリエットには、ことわざがたくさん出てきます。世の中や人間の本質を鋭くついているものばかりです！」
英語の先生は若くて熱心だけど、カフェイン中毒かってくらいハイテンション。「では、シェイクスピアから少し離れて、日常生活で使うことわざの例をいえる人？」
背に腹はかえられない、とか？　頭ガンガン、背中びしょびしょ状態で考える。あとは、必要は発明の母。とかく浮き世はままならぬ。
教室のドアが開いた。事務の人が先生に目で合図してから、クラスじゅうにきこえるようにい

う。「エイブリー・グラムスさん、校長室まで来てください」
再試の採点でも終わったのかな。

謝ってもらおうなんて期待してなかったけど、まさかアルトマン校長が部屋の前まで出迎えに来てるとは思わなかった。ローマ法王の訪問でも受けてるみたいにニッコニコ。
「ああ、エイブリー！　さあさあ、こっちへ」
頭のなかで警報が鳴る。この笑顔、絶対なんかあるでしょ。
校長が校長室のドアを開けると、見慣れたネオンブルーのポニーテールが見えた。
「リビー？」
リビーはドクロ柄のスクラブを着たまんまでノーメイク。職場から直行してきたってことだ。老人介護施設の職員が勤務時間中にふらっと出てくるなんてありえない。
よほどの緊急事態じゃない限り。
「まさかパパが……？」言葉がつまって出てこない。
「お父さまはお元気です」
リビーでもアルトマン校長でもない声がする。パッと顔をあげて、リビーの向こうを見た。校長室の椅子に人がすわっている。わたしとそう歳が変わらない男の人。なに？　どうなっちゃってるの？
その人は上質なスーツを着ていた。どこかに側近でもいそうな重要人物って感じ。
「きのうの時点で、リッキー・グラムス氏は無事です」

落ち着きのある低い声。隙がまったくない。「デトロイトから一時間ほどのミシガン州のモーテルで、酔いつぶれているところを目撃されています」

じろじろ見ちゃいけないと思うのに、ムリ。明るい色の髪。シルバーグレーの瞳。シュッとした輪郭の整った顔立ち。

「どうしてそんなこと知ってるんですか？」

つい口調がキツくなる。ロクデナシの父親がどこにいるかなんて、わたしでさえ知らない。なんでこの人が？

その人はわたしの質問に答えずに、クイッと眉をあげた。「アルトマン校長？　少しの間、席を外していただけますか？」

校長が口を開く。校長が校長室から出ていけっていわれたわけだから、たぶん抗議しようとしたんだろうけど。すると、その人がさらに眉をあげた。

「話はついているはずですが」

校長は咳払いをした。「ええ、もちろん」そして、おとなしく出ていった。ドアが閉まると、わたしは校長を追いだした人をまたじっと見つめた。

「お父さまの居場所をどうして知っているのかという質問についてだが」

瞳はスーツと同じ色。グレーで、ほとんどシルバー。「とりあえず、わたしには知らないことはないと思ってもらったほうがいい」

話の内容がこんなんじゃなければ、ずっと聴いてたい声。

「自分はなんでも知ってるとでも？　ふーん、初対面でそれいっちゃう人、実在したんだ」

「初対面で手厳しいな」
シルバーグレーの瞳でわたしを見すえながら、ちょこっとだけ口角をあげて微笑む。
「どなたですか？　なんの用？」
心の中で、わたしに、と付け加えた。わたしになんの用？
「メッセージを伝えに来ました」理由は不明だけど、心臓がドキドキしはじめた。「従来の方法でメッセージを送ることがかなり難しいとわかったので」
「あたしのせいかも」リビーがわたしの隣でおずおずと口を開く。
「なにがリビーのせい？」わたしはリビーのほうを向いた。おかげでシルバーグレーの瞳から視線を外せる。またすぐに見たくなる衝動を抑えるのに必死。
「だって……」リビーが、ドクロ柄のスクラブが冗談みたいに見える深刻な口調でいう。「まさか手紙が本物だなんて、これっぽっちも思わなかったから」
「手紙？」なにが起きてるのか知らないのはこの部屋でわたしだけらしい。じわじわと、なんかマズいことになってるような感覚が迫ってくる。線路にいて動けないのにどっちから電車が来るのかわからない、みたいな。
「祖父の弁護士がずっと送っていた手紙です」
スーツ姿の人がいう。ふわっと包まれるような声。「三週間近く、あなたのご住所に内容証明郵便で送りつづけていました」
「詐欺だと思ってたから」リビーがいった。
「保証しましょう。詐欺ではない」やわらかい声。

ビジュアルがいい男の保証なんて信用できないことくらいわかってる。

「もう一度最初から説明させてください」その人はわたしたちの間にある机の上で手を組んだ。右手の親指で左手首のカフスボタンを軽く回している。

「わたしの名前はグレイソン・ホーソーン。ダラスにある法律事務所、マクナマラ・オルテガ・アンド・ジョーンズ社の代表として、祖父の遺産相続に関して話すために来ました」グレイソンのシルバーグレーの瞳とわたしの目が合う。「祖父は今月初めに亡くなりました」

意味深な間があく。

「祖父の名前はトバイアス・ホーソーンです」グレイソンがわたしの反応、というか無反応を観察する。「この名前に心あたりは？」

線路にいる感覚が戻ってきた。「いいえ。あるわけないですよね？」

「グラムスさん、祖父はとても裕福でした。そしてどうやらあなたは、家族と、祖父のために長年働いてきた人たちと共に、遺言状に名前がのっているようです」

きこえたけど、情報処理が追いつかない。「遺言……へっ？」

「遺言状です」グレイソンは繰りかえした。かすかな笑みが浮かぶ。「正確になにをあなたに遺したのかはわかりませんが、遺言状の読みあげに出席していただく必要がある。すでに数週間、延期してきたのでね」

国語はできるほうだけど、スウェーデン語でも聴いてる気分。

「なんであなたのおじい様がわたしに？」わたしは尋ねた。

グレイソンが立ちあがる。「そこが目下の問題でしょうね」グレイソンが机のこちら側に出てく

ると、ふいに電車がどっちから来るのかがわかった。
グレイソンの方向からだ。
「勝手ながら、航空券の手配をさせていただきました」
これは招待じゃない。召喚。「どうしてそんな勝手なことを……」いいかけたけとき、リビーにさえぎられた。
「スゴい！」無邪気にはしゃいでこちらを横目で見る。
グレイソンがニヤリとした。「少しおふたりにしましょうか」
じっと目を合わせてくるから、落ち着かなくなってくる。そしてグレイソンはなにもいわずに出ていった。
そのあとたっぷり五秒間、リビーとわたしは沈黙した。
「誤解しないでほしいんだけど。でも、カレって神」リビーがやっと口を開く。
わたしは鼻で笑った。「本人もそう思ってそうだけどね」姿さえ見えなければ、あの影響力をムシするのは楽勝。あそこまでの自信って、どこからくるわけ？　姿勢からも言葉選びからも自信がにじみでてる。ああいう人間にしてみたら、権力は重力みたいにあたり前にあるもの。世界はグレイソン・ホーソーンの意志に従う。お金で買えないものでも、あの瞳で手に入る。
「最初から説明して」わたしはリビーにいった。「ぜんぶ。ひとつもはしょらずに」
リビーはネオンブルーのポニーテールのまっ黒い毛先をもてあそんでいた。「二、三週間前から、手紙が何通も届いてたんだ。宛て名はエイブリーで、あたし気付で。エイブリーがお金を相続したから連絡してほしいって、番号が書いてあった。詐欺だと思って。自分は外国のプリンスで

す、っていうメールみたいな」
「どうしてそのトバイアス・ホーソーンって人が、会ったことも聞いたこともないのに、わたしを遺言状にのせるわけ？」
「わかんないけど。でも、あれって……」リビーはグレイソンが去っていった方向を指差した。「本物だよね。校長先生をやりこめたの、見たでしょ？　どうやって話をつけたんだろ？　賄賂か、それとも脅迫？」
　どっちもでしょ。わたしはスマホを取りだして学校のＷｉ－Ｆｉにつなげた。トバイアス・ホーソーンで検索すると、新聞のトップ記事がヒットする。「著名な慈善家が七十八歳で死去」
「慈善家ってどういう意味かわかる？」リビーが真顔でわたしに尋ねる。「大金持ち」
「慈善活動をする人って意味でしょ」わたしは訂正した。
「要するに……大金持ち」リビーがわたしをじっと見る。「数百ドルしか遺してない相手を迎えにくるために、孫がわざわざ来ないでしょ。何千ドル、ううん、何万ドルって話だよ。エイブリー、旅行だってできる。大学の学費にだってできる。もっといい車だって買える」
　心臓がまたバクバクいいはじめた。「なんだろうと、赤の他人が遺産をわたしに遺すわけないよ」自分にいいきかせるように繰りかえす。ほんの一瞬、空想しそうになったから。いったん夢を見はじめたら止まらなくなりそうで怖い。
「エイブリーのママの知り合いとか？　わかんないけど、遺言状の読みあげにはいかなくちゃ」
「急にはムリ。リビーもでしょ」ふたりとも、仕事を休めない。わたしには授業もある。だけど……いけば少なくともリビーはドレイクから離れられる。たとえ一時的でも。

それにもし本当だったら……。ああ、もう、いろんな可能性を考えないようにするのがどんどん難しくなってくる。

「あたしは二日間、シフトをかわってもらった。エイブリーのバイト先にも電話しといたから」リビーがわたしの手をとる。「ね、エイブリー。旅行にいけるだけでもステキだよね？　エイブリーとあたしだけで」

リビーはわたしの手をギュッと握った。わたしもギュッと握りかえした。「で、遺言状の読みあげってどこでやるの？」

「テキサス！」リビーがニヤニヤする。「しかも手配済みの航空券って、ファーストクラス！」

5.

人生初の空の旅。一万フィート上空から下を見ると、テキサスより遠くだっていけるような気がしてくる。パリ。バリ。マチュピチュ。ずっと、〝いつか〟の夢だった。

だけど今なら……。

隣でリビーが、サービスのカクテルと温かいミックスナッツを前にして天にも昇りそうな顔をしてる。「自撮りタイム！　さ、くっついてツーショット！」

通路の向こうの席の女の人が、リビーに非難がましい目を向ける。イラッとした原因がなにかは不明。リビーのブルーの髪なのか、ドクロ柄のスクラブのかわりに着た迷彩のジャケットなのか、スタッズつきチョーカーなのか、自撮りしてることなのか、テンション高い声なのか。

わたしは最大にすました顔でリビーに寄りかかり、温かいナッツを高く掲げた。

リビーは頭をわたしの肩にのせて写真を撮った。スマホの画面をこちらに向けていう。「着陸したら送るね」一瞬、笑顔が揺らいだ。「ＳＮＳには投稿しないで。ね？」

ドレイクにはいき先を知らせてないんだよね？　リビーにも人生を楽しむ権利があるんだよ、っていいきかせたくなったけど我慢した。けんかはしたくない。

「しないよ」別に大した犠牲じゃない。ＳＮＳのアカウントは持ってるけど、マックスとＤＭするくらいしかつかってない。

そういえば……わたしはスマホを取りだした。機内モードだけど、ファーストクラスは無料のＷｉ－Ｆｉがつかえる。マックスにこれまでの経緯をざっと説明するメールを送って、あとはトバイアス・ホーソーンについて調べまくった。

石油で財を成したのち、事業を多角化。グレイソンが祖父のことを「裕福」といってたし、新聞が「慈善家」って言葉をつかってたから、金持ちなのかと思ってた。

それが大きな勘違い。

トバイアス・ホーソーンは、ただの裕福とか金持ちなんかじゃない。表現する言葉があるとしたら、ありえないほどのクソ大金持ち。億っていっても、一桁じゃおさまらない。

四六二億ドル。それが純資産。数字だけ見てもまったく現実味がない。そのうちわたしは、会ったこともない人がなんだか知らないけどなにかしらをわたしに遺した理由を疑問に思うのはやめた。いくら遺したの？　もはやそっち。

着陸直前にマックスから返信が来た。

「マジで？　からかってる？」
「マジ。今、テキサスいきの飛行機の中。もうすぐ着陸」
マックスからの返信はこれだけ。「ヤバッ」

ゲートを通過した瞬間、パリッとしたまっ白なスーツを着た黒髪の女の人がリビーとわたしを待ちかまえてた。
「グラムスさん」女の人はわたしに、それからリビーに会釈すると、二度目の挨拶をした。「グラムスさん」
それから、黙ってついてくるのがあたり前、みたいにくるっと背を向ける。悔しいけど、わたしもリビーもおとなしくついていった。
「わたくしはアリサ・オルテガです。マクナマラ・オルテガ・アンド・ジョーンズ法律事務所から来ました」また少し間を置いてから、わたしをチラッと横目で見る。「連絡をとるのにかなり苦労したわ」
わたしは肩をすくめた。「車に住んでるもので」
「ウソです。ちょっとー、ちゃんと訂正して」リビーがすかさず口をはさむ。
「お越しいただけて嬉しいです」
マクナマラ・オルテガ・アンド・ジョーンズ法律事務所のアリサ・オルテガは、わたしの言葉を待たずにいった。そっか、この会話におけるわたしのターンって形式的なものなんだな。「テキサス滞在中は、ホーソーン家のゲストのつもりでいてください。わたくしが会社との連絡役にな

ります。なにかあれば、わたくしにおっしゃってください」
弁護士って時給計算じゃないの？　この送迎に、ホーソーン家はどれだけ払ってるんだろう？　アリサが弁護士じゃないかもって選択肢は頭にも浮かばなかった。見たところ、二十代後半。話していると、グレイソン・ホーソーンと話しているのと同じ感覚になる。アリサも成功者だ。
「なにかできることはありますか？」アリサが尋ねながら自動ドアに向かって歩いていく。あんな早足じゃ、ドアが開くのが間に合わないんじゃないかな。
アリサがガラスに激突しないのを確認してから、わたしは答えた。「情報をもらえますか？」
「もう少し具体的に」
「遺言状になにが書いてあるか知ってますか？」
「存じあげません」アリサは縁石の近くにとまってる黒いセダンを手で示して、後部座席のドアを開けてくれた。わたしが乗りこむと、リビーもそれに続く。アリサは助手席に座った。運転席はもう埋まっている。運転手さんの顔を確認しようとしたけどよく見えなかった。
「遺言状になにが書いてあるかは、すぐにわかります」アリサはいった。その言葉は、身につけている〝汚したらタダじゃおかない〟白スーツさながら、パリッとキリッとしていた。「わたくしたち全員、同時に知ることになるでしょう。遺言状の読みあげは、ホーソーンハウスに到着後すぐに予定されていますから」
ホーソーン家じゃなくて、ホーソーンハウス。イギリスの荘園屋敷かなんかみたい。
「そこに泊まるんですか？」リビーが尋ねた。「ホーソーンハウスに？」
帰りのチケットは明日の予約だ。一泊分の荷物しかもってきてない。

「ベッドルームは好きにお選びください。ホーソーン氏は五十年以上前に土地を購入し、その後毎年、すばらしい建築物を追加してハウスを拡張してきました。ベッドルームの総数は把握していませんが、三十以上はあります。ホーソーンハウスは……驚くべき場所です」

今のところアリサから得られた情報のなかでいちばん詳しいのがこれ。もうひと押しと思って聞いてみた。「ホーソーン氏も驚くべき人だったんでしょうね？」

「勘がよろしいんですね」アリサがこちらを振りかえる。「ホーソーン氏は、勘がいい人がお好きでした」

なんか、ゾワゾワッとする。不吉な予感みたいな。そんな理由でわたしを選ぶ？

「ホーソーン氏とはどれくらいのお付き合いなんですか？」リビーがわたしの隣で尋ねた。

「父が、わたくしが生まれる前からトバイアス・ホーソーン氏の弁護士をしていたんです」アリサの声が穏やかになる。いかにも成功者っていう話し方じゃなくなった。「子どもの頃は、ホーソーンハウスで多くの時間を過ごしました」

ホーソーンさんはアリサにとってただの顧客じゃないんだな。「なんでわたしがここにいるのか、理由に心あたりはありますか？」わたしは尋ねた。「どうしてわたしになにかしらを遺したのか、まったくわからないんです」

「あなたは救世主タイプですか？」アリサは、なんてことないふつうの質問みたいに尋ねた。

「いいえ？」なにがいいたいんだろう。

「ホーソーンという名字の人に人生を壊されたことはありますか？」アリサは続けた。

わたしはアリサをじっと見つめて、なんとかさっきより自信を持って答えた。「いいえ」

アリサはニコッとしたけど、目は笑ってなかった。「それはラッキーですね」

6.

ホーソーンハウスは丘の上に立っていた。大きすぎる。広すぎる。お城みたいで、ロイヤルファミリーでも住んでそう。屋敷の前には六台ほどの車がとまっていた。一台だけ、解体して部品を売ったほうがよさそうなオンボロのバイクもある。

アリサはバイクを見つけていった。「ナッシュが帰っているようね」

「ナッシュ？」リビーが尋ねた。

「ホーソーン家の長男です」アリサはバイクから視線を外して、屋敷を見あげた。「兄弟は四人」

四人兄弟。そのうちのひとり、すでに会ったことのあるグレイソンの姿は目に焼きついてる。完璧に仕立てられたスーツ。シルバーグレーの瞳。自分には知らないことはないといったときのあのエラそうな口調。

アリサが意味ありげな視線を向けてきた。「経験者として忠告しておきます。ホーソーン家の人間に心を奪われないように」

「心配しないで」臆測でいわれたことにも、考えてることを見抜かれたことにも、イラッとした。「心に鍵をかけてあるから」

玄関ホールは、家が何軒も建つくらい広かった。軽く一千平方フィートはある。造った人はきっ

と、玄関で舞踏会を開かなきゃいけないと思ってたらしい。両側に石のアーチが並んでいて、二階まで吹き抜けになってて、木の天井には手のこんだ彫刻が施されている。見あげるだけで圧倒される。

「到着したんですね」

ききおぼえのある声がして、ハッと我にかえった。

「定刻通りです。フライト中に不都合はなかったかと思いますが」

グレイソンは前とは違うスーツを着ていた。黒で、シャツとネクタイも黒。

「グレイソン」アリサが氷の眼差しで見つめる。

「お邪魔でしたら申し訳ない」グレイソンがいう。

「あなた十九歳でしょう。十九歳らしくすると死ぬの？」アリサがピシャリという。

「死ぬかもしれませんね」グレイソンは歯を見せて笑った。「さあ、こちらへ」

あ、わたしを迎えに来たわけね。「おふたりとも、コートをお預かりしましょうか？」

「着ておきます」反論したい一心で答えた。それに、コート一枚でもこの世界との間に隔たりがあったほうがいい。

「そちらは？」グレイソンはリビーに優しく尋ねた。

まだあっけにとられてたリビーは、コートを脱いで手渡した。グレイソンが石のアーチのひとつをくぐって歩いていく。その奥に、通路があった。壁に小さい正方形のパネルがいくつも並んでいる。グレイソンはパネルのひとつに手を当てて押した。手を九十度回転させて、次のパネルを押しこみ、それから、ついていけないほど速い動きで、少なくともあとふたつのパネルを叩い

た。ポンという音がしてドアが現れ、勝手に壁から分離したかと思うと、開いた。
「え、これって……」思わず声が出る。
グレイソンは手を伸ばしてハンガーを取りだした。「コートクローゼットです」
説明じゃなくて、ただ事実を述べてるだけ。古い家ならこういうクローゼットがあるものだ、みたいに。
アリサはそれを合図に、わたしたちを有能なグレイソンの手に委ねていなくなった。わたしは必死で、口をぽかんと開けて突っ立ってる以外の反応をしようとしてた。グレイソンがクローゼットを閉めようとすると、奥のほうから音がしてきた。
キィィ……ドン！　クローゼットの後ろのほうからカサコソと音がして、中に隠れていた人物がコートをかきわけて明るいところに出てくる。わたしくらいか、少し年下の男の子。スーツを着てるけど、グレイソンとの共通点はそこだけ。こっちのスーツは、着たまま昼寝を二十回くらいしたみたいにしわくちゃ。ジャケットのボタンはかけてないし、ネクタイは結ばずに首にかけてるだけ。背は高いけど、幼さの残る顔に、ダークな色の巻き毛。目はライトブラウンで、肌の色も同じ。
「ぼく、遅刻？」グレイソンに尋ねる。
「その質問は腕時計に直接すればいい」
「ジェイムソンはもう来た？」巻き毛の男の子は質問をかえた。
「いいや」
巻き毛の男の子がニコーッとする。「じゃ、遅刻じゃない！」そういって、グレイソン越しにリ

ビーとわたしを見た。「で、このふたりがお客さんだね！　グレイソンったら、紹介してくれないなんて失礼じゃん」

グレイソンのあごの筋肉が引きつる。「こちらがエイブリー・グラムスさん。それからお姉さんのリビーさん。ここにいるのが、わたしの弟のアレクサンダーです」

紹介はそれでおしまいかと思ったら、グレイソンは眉をあげて続けた。

「家族からはザンダーと呼ばれていて、末の弟です」

「ふたりも、ザンダーって呼んで。ぼくは兄弟のビジュアル担当。ふたりが考えてること、当ててみようか。兄弟に見えないって思ってるんでしょ。ぼくの隣にいるマジメ君は、たしかにアルマーニのスーツを着こなしてる。だけどね、その笑顔で世界じゅうを幸せにできる？」ザンダーは早口でしかしゃべれないらしい。「ムリ。ぜったいできないよ」

ザンダーがやっと息継ぎをしたすきに、リビーが口をはさんだ。「会えて嬉しいです」

「クローゼットのなかが好きなの？」わたしは尋ねた。

ザンダーは手についたほこりをパンツでパンパンと払った。

「秘密の通路だよ」そういって、今度はパンツについたほこりを手で払おうとする。

「この家って、秘密の通路だらけなんだ」

7.

スマホで写真を撮りまくりたくて指がうずうずするけど、必死で抑えてた。リビーにはそんな配

慮はなさそうだけど。
「マドモアゼル、ちょっとお伺いしますが……」ザンダーがリビーの写真撮影を遮るようにして声をかける。「ジェットコースター、好き？」
リビーは、飛びだすんじゃないかと思うくらい目を見ひらいた。「この家、ジェットコースターがあるの？」
ザンダーがニヤリとする。「ってワケじゃないんだけど」
そういうなり、百九十センチはありそうなホーソーン家の〝末っ子ちゃん〟はリビーを玄関ホールの奥に引っぱっていった。
えっ？　はいっ？　〝ってワケじゃない〟ジェットコースターってなに？
隣で、グレイソンがふふんと笑う。あ、わたしを見て笑ってる？　なんか、イラッとする。
「なに？」
「なんでもありません」
グレイソンはそう答えたけど、口角の上がり具合からしてなんでもなくないのはわかる。
「ただ……顔に出るタイプのようですね」
いいえ。わたしは顔には出ないタイプ。リビーからはいつも、表情が読みにくいっていわれてる。このポーカーフェースのおかげで、ハリーに何か月も朝食をおごってきた。断じて顔に出ない。
顔をじろじろ見られる覚えもない。
「ザンダーのことは謝っておく。弟は、考えてからものをいうとか、三秒以上じっとすわってい

るとか、そういうことが苦手でね」そういってグレイソンはうつむいた。「本人にしてみたら最悪の気分のときでも、兄弟のなかでいちばん陽気なやつだ」

「アリサから、四人兄弟だって聞いてるけど」

思わず聞いてしまった。この家族って何者？　あなたは何者？

「兄がひとりと弟がふたりいる。母親は同じだが、父親は違う。おばのザラには子どもはいない」グレイソンがわたしの後ろを見た。「ちょうど家族の話が出たところで、前もって二度目の失礼をわびておいたほうがよさそうだ」

「グレイソン！」

服も動きもひらひらした女の人が近づいてくる。ブラウスのたっぷりした裾の揺れがおさまってから、いくつくらいか想像してみた。三十以上、五十未満。それ以上絞れない。「みんな大広間で待ってるのよ！　まあ、みんなではないけど、もうすぐ揃うはず。弟はどこにいったの？」

「どちらの弟ですか、お母さま」

〝お母さま〟があきれたというふうに目玉をぐるんとさせる。「もう、グレイソンったら、お母さまはやめてっていってるでしょ」わたしのほうを向いて、すごい秘密を打ち明けるみたいに続ける。「この子、スーツを着て生まれてきたと思ったでしょ？　小さい頃は裸で走り回っていたのよ。ほーんと自由奔放で。服なんか着やしないんだから。そうね、それこそ四歳まで。まあ正直、着せようともしなかったけど」少し間を置いて、あからさまにわたしを観察する。「あなたがエイバね？」

「エイブリーです」グレイソンが訂正する。裸で走り回っていた過去をバラされて恥ずかしいと

しても、表には出さない。「こちらのお嬢さんの名前はエイブリーです、お母さま」
グレイソンのお母さんはため息をついたけど、顔は笑っていた。息子の姿を見てニコニコせずにはいられない、みたいに。「子どもたちにはファーストネームで呼ばせるって決めてたのよ。親だから子どもだから、みたいなのはイヤだから。ただね、頭のなかにあったのは女の子だったの。それが男の子ばっかり……」そういって肩をすくめる。肩をすくめてこんなに優雅なことってある？
客観的に見たら、グレイソンのお母さんはトゥーマッチでからみづらい。でも主観的には？　目が離せないほど魅力的。
「ねえ、お誕生日を聞いてもいい？」
不意打ちの質問だった。口があってちゃんと機能してるはずなのに、いきなりすぎて答えられない。グレイソンのお母さんはわたしの頬に手を当てた。「さそり座？　やぎ座？　うお座じゃないのはたしかだけど……」
「お母さま」グレイソンは呼びかけてから、いいなおした。「スカイ」
ん？　あ、そっか、スカイっていう名前なのか。グレイソンは母親の機嫌をとって、星占いの尋問をやめさせようとしてるんだ。
「グレイソンって優しいのよ」スカイがわたしにいう。「優しすぎるくらい」それからウインクした。「あとで話しましょう」
「グラムスさんは、暖炉を囲んでおしゃべりしたりタロット占いをしたりするほど長居なさるつもりはないんじゃないかしら」

スカイと同い歳くらいの女性が会話に割りこんできた。スカイがひらひらブラウスの人なら、こちらはペンシルスカートとシャツの人。
「ザラ・ホーソーン・カリガリスよ」ザラがわたしをじっと見る。名前負けしない硬い表情。「聞いてもいいかしら？　あなた、父とどういうお知り合い？」
広々とした玄関ホールが静けさで包まれる。わたしはごくっと唾をのんだ。
「知り合いじゃありません」
グレイソンがまたしてもじっと見つめてるのがわかる。ザラがぎこちない笑みを浮かべた。
「そう。よかったわ、いらしてくださって。ここ数週間、大変だったものだから。想像がおつきになると思うけど」
ここ数週間、連絡がとれなくて大変だった、っていいたいわけね。
「ザラ？　オルテガ氏が話があるそうだ」
髪をピタッとオールバックにした男性が口をはさんできて、ザラの腰に腕を回す。たぶんザラの夫。わたしをチラッとも見ようとしない。
そのぶん、スカイがグイグイくる。「うちの姉は、必要以上に人と話をしないの。わたしはおしゃべりが大好き。おしゃべりって楽しいもの。ほら、だから息子が四人いるのもわかるでしょ？　四人のステキな男性と、親しい会話を楽しくした結果が……」
「そのあたりにしてもらえませんか。金を払ってもいいですから」
グレイソンが不愉快をあらわにしていう。
スカイはグレイソンのほっぺたをペシペシたたいた。「賄賂？　それとも脅迫か買収？　あな

たってほんと、ホーソーン家の人間ね」
スカイはわたしに意味ありげな笑みを向けた。「だから〝氷のプリンス〟って呼んでるの」
スカイの声にも、それから母親に「氷のプリンス」と呼ばれたときのグレイソンの表情にも、なにかがあった。プリンス、つまり正式な相続人……。なんか、ホーソーン家の人たちはわたしの想像以上に遺言状の読みあげを待ちかまえてたんじゃないかって気がしてくる。
この人たちも遺言状の内容を知らない。ふいに、ルールも知らないのに競技場に入ってしまったように感じた。
「さっ、そろそろ大広間にいきましょう」
スカイは片腕をわたしに、もう片方をグレイソンの腕に絡ませながらいった。

8.

大広間は玄関ホールの三分の二くらいの広さだった。正面に巨大な石の暖炉があり、その側面にガーゴイルが彫られていた。やたらリアルなガーゴイルだ。
グレイソンはリビーとわたしに背もたれの高いウイングチェアをすすめると、自分は部屋の前方へ向かった。そこにはビシッとスーツを着こんだ年配の男の人が三人立っていて、ザラと夫と話していた。
たぶんあの三人は弁護士。数分後、アリサも話に加わってきた。わたしは部屋にいるほかの人たちを観察した。白人の老夫婦は、少なくとも六十代。軍人みたいなたぶん四十代の黒人男性が

壁を背にして立ち、左右にある出入り口に目を光らせている。ザンダーの隣にいるのは、どうみてもお兄さん。二十代半ばかな。髪は伸ばしっぱなしで、スーツにカウボーイブーツを合わせてる。ブーツも、外にとめてあったバイクも、かなり使いこんでる感じ。

ナッシュ。アリサが口にしてた名前を思い出す。

やがて、老婦人がひとり、その輪に加わった。ナッシュが腕を差しだしたけど、ザンダーの腕をとる。ザンダーがその人を、リビーとわたしのところに連れてきた。

「ナン、だよ。この屋敷の伝説のオンナ」

「もう、やめてちょうだい。このいたずらっ子の、ひいおばあちゃんよ」

ナンがザンダーの腕を軽く叩く。年齢をまったく感じさせない身のこなしで、わたしの隣の椅子に腰を下ろした。

「歳も意地の悪さも年季が入ってるの」

「ナンは優しいじゃん」ザンダーが陽気にいう。「ぼく、ナンのお気にいりなんだ」

「まったく、なにをいってるんだか」ナンが反論する。

「ぼくは、みんなのお気にいりだからね！」ザンダーはニヤニヤした。

「あの手に負えないあなたのおじいさんにそっくり」

ナンがぶすっとした顔をして目を閉じる。手がかすかに震えているのにわたしは気づいた。「まったくとんでもない子だったわ」声に愛情が感じられた。

「ホーソーン氏のお母さまでいらっしゃるんですよね？」

リビーが優しく尋ねた。高齢者と接する仕事をしてるから聞き上手だ。

ナンは、ここぞとばかりにまたぶすっとした顔をする。「義理の息子よ」
「おじいちゃんもナンのお気にいりだった」
ザンダーが切なそうにいった。お葬式は数週間前に終わってるはずなのに、そこに悲しみがあるのがわかる。感じる。悲しみのにおいがする。
「エイブリー、だいじょうぶ？」隣からリビーの声がした。
ああ、さっきグレイソンに顔に出るタイプっていわれたっけ。
お葬式や悲しみのことを考えるくらいなら、グレイソンについて考えるほうがまだいい。
「だいじょうぶだよ」
そう答えたけど、だいじょうぶじゃない。二年たった今でも、ママが死んだ悲しみは大波のようにわたしを襲う。
「ちょっと外の空気を吸ってくる」わたしは笑顔を作っていった。
ザラの夫がすかさず前に立ちはだかる。「どこにいく？　もうすぐ始まるぞ」そういって、わたしの肘に手をかけた。
わたしはその手を振りほどいた。この人たちが誰だろうと関係ない。勝手に触れてくるなんてありえない。
「ホーソーン家の孫は四人いるんでしょう」冷たくいいはなつ。「数えた限りじゃ、ひとり足りない。すぐに戻ります。わたしがいなくても誰も気づかないでしょうし」
外に出ると、そこは正面ではなく裏庭だった。まあ、これを裏庭といえるかどうかは怪しいもんだけど。手いれが完璧にゆき届いて、噴水やら彫刻庭園やら温室やらがある。見わたす限り、敷

地が広がっていた。木が生えてるところもあれば、さら地もある。でも、ここに立って眺めてると、地平線に向かって歩いていったら二度と戻ってこられないなんてことも普通にありそうな気がしてくる。

「イエスがノーで、一度あるが決してないなら、三角にはいくつの辺がある？」

頭の上から声がする。見あげると、頭上のバルコニーの端っこに男の子がすわっていた。手すりの上で危なっかしくバランスをとって……酔っ払ってる。

「落ちるよ」

「おもしろい選択肢だ」ニヤッとしていう。

「ひとつしかない選択肢だけどね」わたしはいった。

男の子が気だるく笑う。髪はグレイソンより暗くてザンダーより明るい。シャツは着てない。真冬なのによくやるね。そう思いつつ、ついつい顔から下に視線を向けてしまう。引きしまった上半身に腹筋はシックスパック。鎖骨から腰まで、細長い傷痕がある。

「君がミステリーガールか」

「エイブリー」わたしは訂正した。ホーソーン家の人たちから、その悲しみから、逃れるために出てきた。この男の子の顔には悲しみの跡はない。人生なんて楽しいお遊びみたいに。自分だけはほかの人たちとちがって悲しんでないみたいに。

「ふーん、で、ミステリーガールだからMGって呼んでいい？」

「ダメ」わたしは腕を組んだ。

男の子が手すりの上で立ち上がってよろよろする。一瞬、ゾッとするような光景が頭に浮かぶ。

本当は悲しんでるはずだし、あんな高いところに立ってる。ママが死んだとき、わたしは自暴自棄にこそならなかったけど、誘惑を感じなかったわけじゃない。

男の子が片足に体重をかけて、もう片方の足を前に出す。

「やめて！」そう叫んだ瞬間、男の子は体をひねって両手で手すりをつかんでぶら下がった。背中の筋肉が張りつめて肩甲骨の上で波打っているのがわかる。そして……落っこちた。

わたしのすぐ隣に着地。「こんなとこにいちゃいけないんじゃないの、ＭＧ」

シャツも着ないでバルコニーから飛びおりた人間にいわれたくない。

「それはこっちのセリフ」

わたしの心臓のドキドキがきこえてる？　そっちの心臓は？

「やるべきことをやらないのと、いっちゃいけないことをいう頻度が同じくらいの人間って、なーんだ？」

ジェイムソン・ホーソーン。近くで見ると、瞳は底なしに深い緑色。

「なーんだ？」また繰りかえす。

ジェイムソンの目を見るのはやめよう。腹筋も。無造作ヘアも。

「酔っ払い」。

わたしは答えてから、どうせまたウザいことをいってくると思ってたたみかけた。

「それから、ふたつ」

「えっ？」

「さっきの答え。イエスがノーで、一度あるが決してないなら、三角には……辺が……ふたつ」

ゆっくりと答えて、答えをどうやって導いたかはわざわざ説明しなかった。
「一本とられた、MG」
ジェイムソンはわたしの前をスッと通りすぎていった。むき出しの腕がわたしの腕をかすめる。
「やられたよ」

9.

そのあともうしばらく裏庭にいた。今日起きたことはひとつも現実とは思えない。そして明日、わたしはコネチカットに戻る。できれば少しだけリッチになって、みやげ話をもって。そしてたぶん、ホーソーン家の人たちとはもう二度と会わない。
こんな景色を見ることも二度とないだろう。
大広間に戻ると、ジェイムソンは奇跡的にシャツを着ていた。ジャケットまではおってる。わたしのほうを見てニコッとすると、軽く敬礼してみせた。隣にグレイソンが張りつめた顔で立っていた。
「では、みなさんお揃いのようですので始めましょう」弁護士のひとりがいった。
三人の弁護士が三角形に並んでいる。口をひらいた弁護士はアリサと同じ黒髪で、浅黒い肌に自信に満ちた表情。マクナマラ・オルテガ・アンド・ジョーンズ法律事務所のオルテガ氏だろう。あとのふたりは、たぶんジョーンズ氏とマクナマラ氏だろうけど、その両側に立っていた。
遺言状を読みあげるのに弁護士が四人？

オルテガ氏は部屋の隅々まで届くように声をはりあげた。
「お集まりいただいたのは、トバイアス・タッターソール・ホーソーン氏の遺言状の読みあげを聞いていただくためです。ホーソーン氏の指示により、みなさんひとりひとりに宛てた手紙を我が事務所の者たちが配布します」
ほかのふたりが部屋を回って、ひとりずつ封筒を手わたしていった。
「手紙は読みあげが終わってからご開封願います」
わたしも封筒を渡された。表にはわたしのフルネームが飾り文字で書かれている。隣にいるリビーも顔をあげたけど、弁護士はそのまま素通りして、ほかの人たちに封筒を配りつづけた。
「ホーソーン氏は、以下の全員が遺言状の読みあげに対面で出席すること、と明記していました。スカイ・ホーソーン、ザラ・ホーソーン・カリガリス、ナッシュ・ホーソーン、グレイソン・ホーソーン、ジェイムソン・ホーソーン、アレクサンダー・ホーソーン、そしてコネチカット州ニューキャッスル在住のエイブリー・カイリー・グラムス」
なんか恥ずかしい。気づいたら服が透けてた、みたいな感じ。
「お揃いですね。では始めます」オルテガ氏は続けた。
リビーが手をギュッと握ってくる。
「わたし、トバイアス・タッターソール・ホーソーンは、健全な精神と肉体のもと、全財産、つまり金銭的および物的資産を含むすべてを、以下のように処分することと決めました。
長年の忠実な奉仕に対する感謝として、アンドリュー及びロッティ・ラフリンにそれぞれ十万ドルと、テキサス州のわたしの土地の西側境界にあるウェイバックコテージの終身居住権を贈る

こととする」

さっき見かけた老夫婦が互いにギュッと体を寄せる。十万ドル？　ラフリン夫妻は遺言状の読みあげに参加義務を明記されてなかったのに、あっさり十万ドル。それぞれに！

息して。自分にいいきかせる。

「警備部隊隊長、ジョン・オーレンは、数え切れないほど何度も、そしてあらゆる方法でわたしの命を救ってくれた。現在マクナマラ・オルテガ・アンド・ジョーンズ法律事務所に保管されているわたしの道具箱の中身と三十万ドルを贈る」

ラフリン夫妻もジョン・オーレンも、トバイアス・ホーソーンの知り合いだ。トバイアスのために働いてた人たちで、トバイアスにとって大切な人たち。でも、わたしは赤の他人。

「義理の母のパール・オデイ、つまりナンに、年間十万ドルの年金と、付録に記載されている医療費の信託を贈与します。亡き妻、アリス・オデイ・ホーソーンが所持していた宝石すべては、わたしの死後、その母親のナンに譲渡し、ナンの死後は本人の判断で分配されるものとする」

ナンはふんっといって、誰にともなくいった。

「おかしな気を起こさないほうがいいわ。わたし、誰よりも長生きするから」

オルテガ氏は口元をゆるめたけど、すぐにその笑みを引っこめた。「わたしの……」そこで言葉を詰まらせて、改めていう。「わたしの娘たち、スカイ・ホーソーンとザラ・ホーソーン・カリガリスには、わたしの死亡日時に存在しているすべての負債を完済するための資金を贈与します」

オルテガ氏は再び言葉を詰まらせ、唇をギュッと結んだ。ほかのふたりの弁護士はまっすぐ前を見つめ、ホーソーン家の誰とも目を合わせないようにしている。

「さらに、スカイにはわたしのコンパスを贈る。いつも真北を知ることができるように。そしてザラにはわたしの結婚指輪を。わたしが娘たちの母親を愛したように、揺るぎなく心から愛することができるように」

またしても間がある。どんどんつらそうな空気になってくる。

「続けてください」ザラの夫がいった。

「加えて、娘たちにはそれぞれ……一回限り、五万ドルを贈与します」

え……五万ドル？

わたしが思ったのと同時に、ザラの夫が同じ言葉を口にした。怒りをあらわにした声で。

トバイアスが娘たちに遺した額って、警備隊長よりも少ないの？

ふいに、スカイがグレイソンを「氷のプリンス」と呼んだことが、まったく新しい意味を帯びてきた。

「あなたね。あなたが仕向けたんでしょう」

ザラがスカイのほうを向く。声は荒げてないけど、よけい怖い。

「わたしが？」スカイがムッとする。

「パパはトビーが死んでからずっとおかしかった」ザラは続けた。

「姿を消してから、ね」スカイが訂正する。

「あーもう、いい加減にして！」ザラが抑えきれずに声をはりあげる。「スカイ、あなたはパパを洗脳したんでしょ？　上目遣いでいいくるめたんでしょ。遺産はぜんぶ、わたしたちを飛びこえて、自分の……」

「息子たちに」スカイの声は冷たかった。「その先にいうべき言葉は、息子たち、よ」
「私生児、っていうつもりだったんだろ」ナッシュが濃いテキサス訛りでいった。「おばさんがこれまでさんざん口にしてきた言葉だからな」
「わたしにも息子がいたら…」ザラが声を詰まらせる。
「でも、いない。そうでしょ、ザラ？」スカイが容赦なくいう。
「もうたくさんだ。そこの件はあとで話し合おう」ザラの夫が口をはさんだ。
「残念ながら、話し合う余地はありません」オルテガ氏が再び口を開いた。「遺言状は絶対で、異議を申し立てようとする者には相当な罰則が科せられることとなっています」
ざっくりいうと、引っこんでろ、だ。
「では、続けます」オルテガ氏は手元の遺言状に再び目を落とした。「孫たち、ナッシュ・ウェストブルック・ホーソーン、グレイソン・ダベンポート・ホーソーン、ジェイムソン・ウィンチェスター・ホーソーン、アレクサンダー・ブラックウッド・ホーソーンに贈与するのは……」
「全財産」ザラが苦々しくつぶやく。
オルテガ氏が声をはりあげた。「それぞれ二十五万ドル。二十五歳の誕生日に支給するものとする。それまでは受託者であるアリサ・オルテガが管理すること」
「なんて？」アリサが思わず声をあげる。「えっ……なんて？」
「クソッ」ナッシュが楽しそうにアリサに向かっていう。「いいたかったのは、クソッ、だろ」
トバイアスは、全財産を孫たちに譲ったわけではなかった。二十五万ドルなんて、資産規模を考えたら微々たる額だ。

「どういうことだ？」グレイソンが声をあげた。
孫たちでもない。娘たちでもない。脳が思考停止。耳鳴りがする。
「皆さん、ご静粛に」オルテガ氏が片手をあげる。「最後まで読みあげさせてください」
四六二億ドル。心臓がバクバクして口から飛びだしそうだし、喉がカラカラ。トバイアスは四六二億ドルの資産を所有してて、孫たちには合計百万ドルしか遺さなかった。娘たちには合計十万ドル。使用人たちに合計五十万ドル、ナンには年金を……。
計算が合わない。どうやっても合わない。
ひとりずつ、部屋じゅうの人たちの視線がわたしに集まってくる。
「残りの資産は、特に指定のないすべての不動産、金銭的資産、および全財産を含めて、エイブリー・カイリー・グラムスに譲渡します」

10.

あってはならない。
こんなことが起きるはずがない。
これは夢だ。
幻覚を見てるんだ。
「全財産をエイブリーに？　どうして？」
スカイの声は、わたしをハッと我にかえらせるほど甲高かった。

わたしの星座占いをしようとしたり、息子や恋人たちの話を聞かせてくれたりした感じのいい女性はもういない。スカイは、いまにも人を殺しそうな顔をしていた。

「この子、何者なの？」ザラが切れ味鋭いナイフみたいな口調でいう。

「なにかの間違いだ」

グレイソンが、間違いの処理なら日常的にしてるって感じでいう。賄賂、脅迫、買収。〝氷のプリンス〟はわたしをどうするつもり？　こんなこと、あるわけない。心臓が鼓動するたびに、息を吸うたびに、吐くたびに、声が聞こえる。こんなことが起きるはずがない。

「そのとおりです」

声がかすれてしまい、周りのわめき声にかき消されてしまう。

もう一度、今度はもっと大きな声でいった。

「グレイソンのいうとおりです」みんながわたしのほうを向きはじめる。「きっとなにかの間違いです」

声がひっくりかえる。たった今、飛行機から飛びおりたみたいな感じがする。スカイダイビングをしてて、パラシュートが開くのを待ってるみたい。

これは現実じゃない。現実のはずがない。

「エイブリー」リビーがわたしの脇腹をつつく。不用意なことといっちゃダメ、って合図だ。

でも、ムリ。きっと手違いがあったんだ。会ったこともない人が何百億ドルもの財産を遺してくれるなんて。そんなことはありえない。以上。

「ほらね？」スカイがわたしの言葉に飛びつく。「エイバ本人がありえないっていってるのよ」

名前を間違えたのは、今度はわざとのはず。さっきの読みあげで、名前わかってたはずだし。
ここにいるみんなが、わたしの名前をわかってる。
「間違いではありません」オルテガ氏はわたしの目を見てから、ほかの人たちに向き直った。
「そして、トバイアス・ホーソーンの遺言は絶対に覆せません。残る詳細はエイブリーのみに関係することなので、これくらいにしておきましょう。ひとつだけ、はっきり申しあげておきます。遺言に明示された条件により、エイブリーの相続に異議を唱える相続人は、遺産の相続権をすべて失います」
エイブリーの相続。
ううう……吐きそう。めまいもする。誰かがパチンと指を鳴らしたら物理の法則が書きかわったみたい。重力係数が変わって、体がそれに対応できてない感じ。世界が軸から外れて回転してるようだ。
「そんな絶対的な遺言などあるものか。これほどの大金が関わっているのに」ザラの夫がピシャリという。
「それは、あのじいさんを知らない人間のセリフだな」ナッシュが口を挟んだ。
「罠だな」ジェイムソンが呟いた。「あと、なぞなぞ」深い緑色の瞳でわたしを見つめているのがわかる。
「君はここにいないほうがいい」グレイソンがわたしにそっけなくいう。提案じゃない。命令。
「厳密にいうと……」アリサは、たった今ヒ素をのんだ人みたいな口調でいう。「ここはエイブリーの家です」

やっぱりアリサも遺言の内容を知らなかったんだ。家族と同じように、なにも知らされてなかった。どうしてトバイアスは、こんなふうに全員を欺けたんだろう？　血縁にこんなことをするってどんな人？

「意味不明」めまいとしびれと戦いながら、わたしは心の声を口にした。だって、なにもかも意味不明。

「娘のアリサのいうとおりです」オルテガ氏は中立的な口調を保った。

「グラムスさん、あなたがすべてを所有しているのです。財産だけでなく、ホーソーンハウスを含むホーソーン氏のすべての不動産も。いくらでもご説明しますが、相続条件によると、現在の居住者には退去させる理由がない限り、そしてあなたが退去させるまで、居住権が与えられています」そこでまた、充分な間をおく。「いかなる状況においても、現在の居住者の方があなたを退去させることはできません」警告するような声でいった。

ふいに部屋が静まりかえった。殺される。この部屋にいる誰かに本気で殺される。元軍人と踏んでいた男の人が、わたしとトバイアスの家族の間にのしのし歩いてきた。なにもいわずに胸の前で腕を組むと、わたしを自分の背後に隠した。

「オーレン！」ザラがショックで声をあげる。「あなたはこの家族のために働いているのよ」

「わたしはホーソーン氏のために働いていました」

ジョン・オーレンは少し間を置いて、一枚の紙を掲げた。すぐに気づいた。さっき受けとった手紙だ。「ホーソーン氏が最後に望んだのは、わたしがエイブリー・カイリー・グラムスさんの雇用にとどまることでした」

オーレンはわたしをチラッと振りかえっていった。「ボディーガードです。これから必要になるでしょう」
「ぼくら以外にも命を狙うヤツはわんさかいるだろうしね！」ザンダーがふざけて前に出てくる。
「下がってください」オーレンは命じた。
ザンダーは両手をあげた。「降参！　カンペキ降参だよ！」
「ザンダーのいうとおりだ」ジェイムソンが、ゲームをしているみたいにニヤッとする。「世界じゅうが注目するはずだよ、ミステリーガール。世紀の大ニュースになるな」
世紀の大ニュース。脳がようやく機能しはじめた。これは冗談なんかじゃないって、わかってきたから。
妄想にとりつかれてるんじゃない。夢を見てるんじゃない。
わたしは、億万長者の相続人だ。

11.

とっさに部屋を飛びだして、気づいたら外にいた。ホーソーンハウスの正面玄関のドアが後ろでバタンと閉まり、いきなり冷たい空気を顔に浴びた。たぶん息はしてるはず。だけど体ごとどこか遠くにいっちゃったみたいで感覚がない。いわゆるこれがショック状態？
「エイブリー！　だいじょうぶ？」
リビーが追いかけてきた。心配そうにじっと見つめていう。

『相続ゲーム エイブリーと億万長者の謎の遺言』
2025年7月24日発売